# おわりに

## 思い出

山鹿みか

主人がこの世を去ったのは昭和四十五年十二月六日朝五時半でした。

長くわずらっていましたが、目も耳も言葉もハッキリして、すこしもまちがったことはありませんでした。五十三年間生活をともにしてきましたけれど、主人も私もひみつかくしがないのですからあらそいのタネなどなかったのです。それで私のような者でもつとめて来られたのです。

でも長い間のことですから、いろいろの事もあり、私ひとりで悩んだこともたびたびでした。主人は思いたったら損もとくも考えない人ですから、内のことなどおかまいなしだったのです。二十一歳で何ひとつない所へ来てすこしずつ買いもとめ、やれやれと思うと、みんな置きざり、すて売りして新しい生活をはじめるという、そんなくりかえしでした。だから私は、どこにいても自分にできる仕事をして、すこしでもたくわえ、それでどうにかやってきました。

皆様のおかげで今日まで生きてこられ、私はほんとうにしあわせだと思っています。

# 父のこと

瀬川アイノ

アナキストでエスペランチストなどというといかにもむずかしい人を想わせますが、父は一見やさ男でお人好し、子ぼんのうで家庭的な人でした。

私の一番古い記憶。戸越時代、大きな印刷機械が入口いっぱいに置かれていて、私はそのかげでカクレンボなどしました。その頃赤川啓来さんが脱走兵として逃げてきたりしたのです。小学一年の時は中延町で、特高刑事がたずねてくると、おしゃまな私はお茶をはこんだりしました。父からメーデーの歌を教えてもらいました。日曜の床の中できいた、エスペラントの話や第四次元のナゾの世界。

小金井から有楽町のジャパン・アドバタイザー社に通勤していた頃は朝は六時、夜は一時帰宅でしたから、日曜日以外はめったに父の顔も見られず、だから日曜日には食パンをうんと買いこんで家中でサンドイッチ作り。そしてコーヒーを魔法ビンにつめ、一家そろって考古学研究です。雨上りの桑畑の土手には土器や石器がころがっています。黒耀石の矢の根がピカピカ光っているなどを見つけると父がほめてくれるので、弟と夢中で探しまわり、すると目もだんだん肥えてきて、とてもよい縄文土器などを見つけました。採集したのを武蔵野出土として吉祥寺の井ノ頭公園の茶店前に展示したこともあります。その頃父が腸チブスにかかりました。国分寺跡の瓦を掘り出したのがたたったそうです。花小金井の隔離病院に一カ月とじこめられ、母は無神論だがその時はじめて父を助けてほしい一心で太陽に手をあわせたといいます。



小金井の家は広く、アヒル三四、山羊二頭、犬一匹を飼っていて、栗や柿の木、野菜畑と薬草畑があって、母はその忙がしさに夕方縁側のガラス戸を締めながら、立ったまま眠ってしまったそうです。

父は通勤の二時間の電車の中で老子のエス語訳をやっていました。毎晩の遅い帰宅。武蔵野の夜空に星が美しくかがやき、父は星のとりこになって冬の夜にも戻り道観測してくるのです。自分で作った望遠鏡で月蝕の観測もやりました。宝石をちりばめたような星空の下で父が話してくれる星座の物語を聞いたことを私はおぼえています。

やがて、思い出深いこの小金井の家をひき払い、昭和十四年秋、いよいよ台湾行きとなります。父が印刷、私は洋裁、弟は写真とこれだけあれば日本を脱出して南方のどこへいっても生活していけるだろうという父の計画でした。もちろんそううまくはいかなかったけれど、一見無鉄砲に見えながら、父なりのあれこれの計画があったのです。その頃は不景気で、家と土地を手離すのも、三回も新聞広告を出してやっと買手が見つかるという状態でした。いよいよ出発する日まで、あちらの食物に慣れるため、横浜の支那人街の食堂をあれこれ食べ歩きました。おいしかったコイの丸煮のことなどを私はおぼえています。そしてその時の楽しそうだった父の表情が今もはっきり心にうかんでくるのです。

このように父の思い出を書き出すと限りありません。あらかじめ自分の遺体の始末までつけてこの世から消えていった父は、まさに一生をその思想と信条で全うした人だと思います。

最後に、私の夫瀬川繁は、アナキズムのことなど一度も勉強したことのない人間ですが、話すこと

や行動することなどをみて、父は理論ぬきの自然のアナキストなんだとよく苦笑していました。そんな夫と周囲の家族の大きな理解があって、〈山鹿文庫〉もできあがったものです。向井さんはじめ同志の方のお尽力とともに、母も私もそのことを心からうれしく感謝しながら筆をおきます。

## あとがきに代えて

本稿は、雑誌『現代の眼』に三回連載した「山鹿泰治・人と生涯」（四百字詰約百枚・主として中国アナキズム運動との交流・エスペラント活動について記したもの）―を土台に、さらに二百八十枚ほどを新しく書き、年譜とともに山鹿泰治の全生涯を、評伝風に浮彫りにしようとしたものである。

書きおわった今、全体をふり返ってみて、結果的にはただ年代を追って山鹿の表面の動きを描くことに終始し、その内面的なものについては、ほとんど触れることができなかったことを痛感している。また本書は、山鹿の生前を知る縁故関係者だけでなく、新しく若い同志や、一般の読者にもひろく、という思いから、日本の〈アナキズム運動史〉あるいはその傍史としても読みうるものとして、その時代の状況、関連する運動の動きなどと合わせてもうすこし詳細にかく筈であったが、紙数の関係もあって至って中途半端なままに終っている。とくに戦後の部分は殆ど書かれたものがないので、他日あらためて補足したい。また、当初予定した「年譜・関連運動史年表」は残念ながら掲載できず割愛する結果となった。別に何らかの形で発表したいと思う。

これらの不充分さとともに、筆者の未熟不勉強によって、記述中にしばしば思いちがいや、たとえ



ば初歩的な年代、人名、事件などでの誤りが、多分に散見されることと思われる。今後の補訂のため、ぜひ御教示いただきたい。

なお山鹿泰治について、より深く知るためには〈山鹿文庫〉（沼津市内浦三津五五九―瀬川方）がある。この〈山鹿文庫〉は、山鹿がのこした遺品の新聞・雑誌切抜き類、雑印刷物、ノート、手稿、図書類（全部で千点弱――戦前のものは、山鹿の南方移住によって殆ど失われ、主として戦後のもの）を整理して、分類目録とともに陳列したものである。整理作業は、七一年二月有志の手によってはじめられ、凡そ月に二～三日、七人～一〇人位が市川中山にあつまり、ミカ未亡人が三津へ移転してからも続いた。そして七二年五月まで、約一三回のべ二五〇人の共同作業で、ともかく第一段の整理が終った。

この〈山鹿文庫〉は、一般公開はしていないが、申込みをすれば、家人の都合よい時なら閲覧できるだろう。

はじめ本書は、ミカ未亡人が三周忌に何かを、という向井への相談から、数十頁のパンフとして知己縁辺に配られる筈であったが、その日限にまにあわず、内容も予想以上にふくれて、このような形のものとなった。脱稿までに何かと世話になった芳村、戸駒、戸田、長谷川その他の諸君、ならびに刊行の大きな力となった奥沢君に感謝する。

向井　孝（一九七四・一・二四）

## 山鹿泰治・略年譜

一八九二年（明25） 6月25日父善兵衛と母京の間に第十二子として京都に生まれる。

一八九九年（明32） 京都市竜池小学校へ入学

一九〇五年（明38） 京都府立第一中学校へ入学

一九〇七年（明40） 2月名古屋まで徒歩で家出 3月許しを得て上京 出版社有楽社の住み込み小僧となる 3月有楽社社内のエスペラント講習会でエス語を学ぶ—15歳

一九〇八年（明41） 救世軍銀座小隊に参加しクリスチャンとして洗礼をうける—16歳

一九〇九年（明42） 8月エスペランチストのフレイレ来日、市内を案内する—日本初の外人とのエス会話 ロビンソン・クルーソーを愛読、冒険旅行を夢みる ヨットを操舵しマストを新大橋の橋桁にひっかける—17歳

一九一〇（明43） 科学熱昂じ、田中館愛橘博士の飛行機講座を受講 長持ちを改造して風洞実験装置をつくる 山田式飛行船を中村竹四郎らと飛ばす 12月有楽社倒産、日本エスペラント協会事務所は内幸町に移転その無給書記として事務所に住み込む 12月築地活版所欧文植字見習工となる—18歳

一九一一年（明44） 2月植字工原田新太郎に出会う 4月原田を通じ大杉栄と会い、アナキズム運動へとび込む決心をする 5月渡辺政太郎・石川三四郎と会い、キリスト教と袂別 6月京都に帰る—19歳

一九一二年（明45） 満州に渡る—20歳

一九一四年（大3） 大杉からの手紙で上海に渡る 師復の民声社で働く 9月平民新聞を手伝うため帰国—22歳

一九一五年（大5） 9月ミカと結婚—23歳

一九一六年（大6） 2月兄慶蔵の死により京都に帰る—24歳

一九一八年（大7） エスペラント宣伝のパンフ発行 8月京都の米騒動に参加—26歳



一九一九年（大8） 小坂との共編『エスペラントの鍵』発行 秘密出版により投獄され、判決は禁箇三年—27歳

一九二一年（大10） 秋に出獄—29才

一九二二年（大11） 6月東京に移る 7月上海へ行く 10月帰国 11月大杉の旅券工作のため渡支—30歳

一九二三年（大12） 1月帰国。長女アイノ誕生 12月第四次労働運動の同人となる—31歳

一九二五年（大14） 5月第六回メーデーの副司会者となる 『日・エス・支・英会話と辞書』を発行 TLESに参加 10月長男大次郎誕生—33歳

一九二七年（昭2） 1月第五次労働運動の同人となる 8月上海労働大学へ講師として渡支 12月帰国—35歳

一九二九年（昭4） 4月東京郊外小金井に移る 11月月刊エスペラント誌『ラ・アナルキスト』を島津、安井らと発行—37歳

一九三〇年（昭5） 4月紀伊長島に移る 8月京都に移る—38歳

一九三一年（昭6） 4月東京小金井にもどる—39歳

一九三六年（昭11） スペイン内乱はじまり、スペインCNTとの連絡担任者として活動—44歳

一九三九年（昭14） 3月『世界語老子』発行 9月台湾高雄へ移住—47歳

一九四〇年（昭15） 上海に渡り一ケ月ほど滞在、張維賢と会う—48歳

一九四一年（昭16） 12月徴用をうけ、フイリッピンへ向う—49歳

一九四三年（昭18） 『日比辞典』発行—51歳

一九四四年（昭19） 9月高雄にもどる—52歳

一九四五年（昭20） 6月大次郎戦死 11月台湾自由社をひらく—53歳

一九四六年（昭21） 4月帰国、京都に落ち付く 6月平民新聞京都支局を自宅におく 10月岩佐、近藤らと九州遊説—54歳

一九五〇年（昭25） 5月日本アナキスト連盟第五回大会を京都に誘致—58歳

一九五一年（昭26） 『エスペラント読本』を発行—59歳

一九五二年（昭27） 5月再建アナ連第二回大会で連
盟代表となる—60歳
一九三五年（昭28）『時の福音』エス対訳を発行
以降、エス語冊子を度々刊行—61歳
一九五四年（昭29） 千葉県市川に移る—62歳
一九五六年（昭31） 11月日本エスペラント運動五〇
年大会で表彰される—64歳
一九五九年（昭34） 第五回原水禁大会全国理事会に
WRI代表として出席—67歳
一九六〇年（昭35） 11月横浜よりインドへ向けて出
発 WRI第一〇回大会に出席—68歳
一九六一年（昭36） 3月帰国 12月脳出血で倒れ左
半身不随—69歳
一九六二年（昭37）『たそがれ日記』執筆開始 8
月『老子直解』発行 山鹿のエス語訳『老子』ス
ペイン語訳がメキシコにて発行—70歳
一九七〇年（昭45） 12月6日永眠—78歳
一九七二年（昭47） 5月山鹿文庫の第一期整理が終
る。



山鹿泰治　人とその生涯

1974年5月10日　発行

著　者　向井　孝（むかい　こう）
兵庫県姫路市亀山354

発行所　青　蛾　房
東京都板橋区赤塚2—35—9
白樺ハウス10号
TEL　938—6632

山鹿泰治「記憶のスケッチ」より